

第35回学習会を、平成24年1月27日(金)19:00~20:00福岡市教育センターにて行いましたので報告いたします。

第35回目の内容

講師 重枝一郎先生(福岡市教育センター主任指導主事)

- 1 生徒指導と学校文化
- 2 学年集会(人権学習)のビデオ鑑賞
- 3 空気づくり 演習「いじめのロールプレイ」



生徒指導と学校文化

1 生徒指導は「エンターテインメント性」

そこにある無数の要素が現在進行形で相互作用を及ぼし合いながら生まれる **空気** のこと

空気の質を問う

(生徒に、教師自身に)

この空気を媒介にして感情は伝染する

「最初の語り」

生徒は教師の語る言葉のみを理解しているのではなく、

表出するものすべて(表情、しぐさ、言葉)の共通点で理解する。

2 学校文化

意図的、継続的に **空気** づくりをした成果

※問題行動に対する指導に終わらず、まわりへの指導や配慮をセットにする
親切を示す

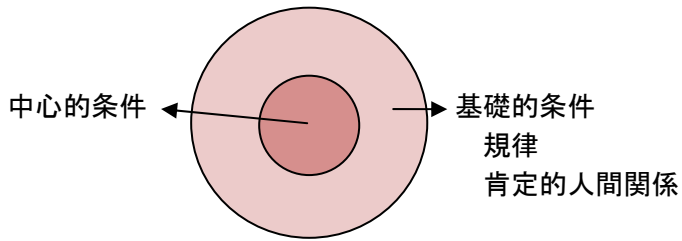
学級風土

学級の雰囲気(明るい、暗いなど、その場の教室の状態を基本とする)

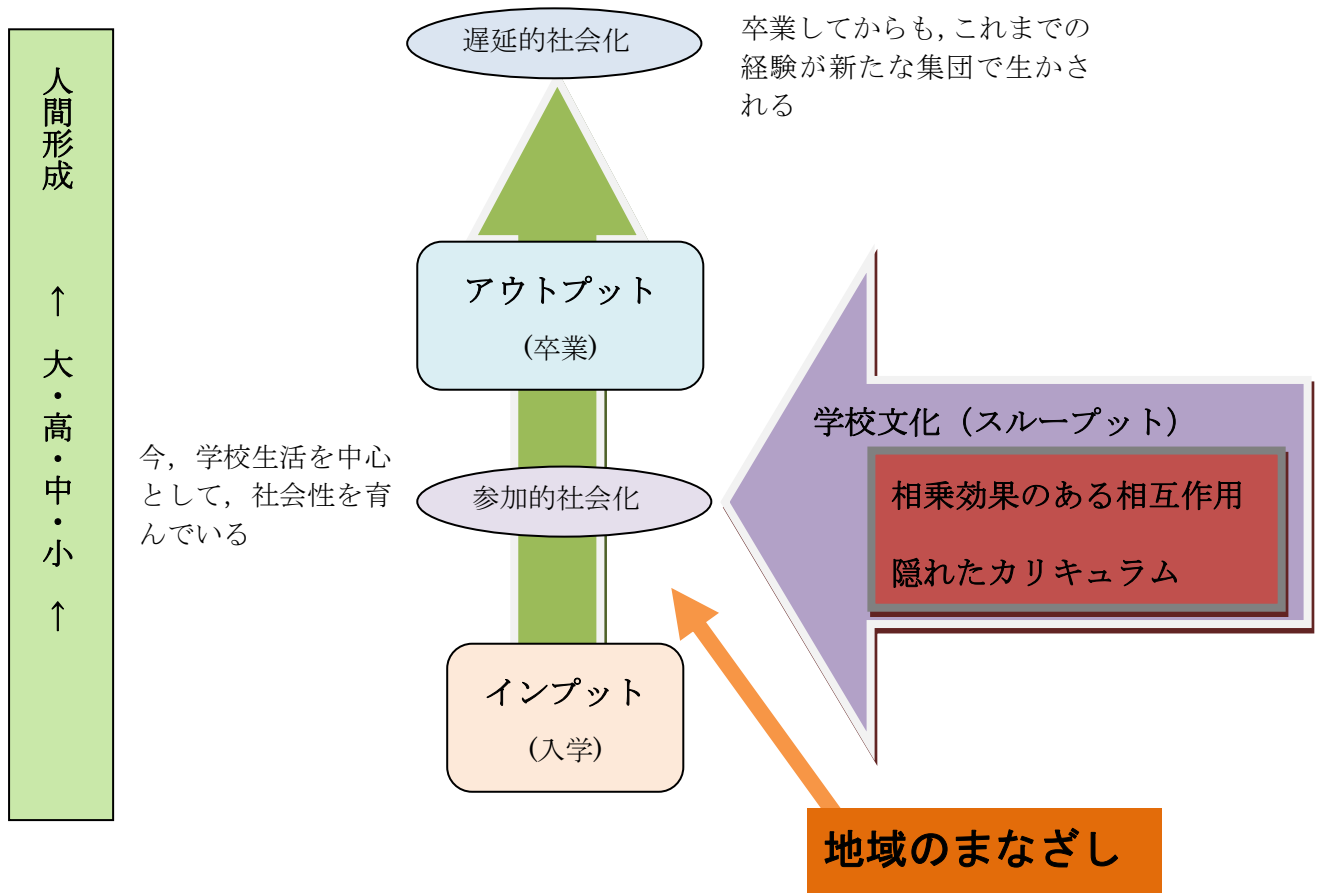
学級文化(意図的かつ刷新しながら継続していく学級活動の成果として生じる

学級の生活様式や内容を中心とした概念)

意図的な文化だけでなく意図せず自ずと醸成されるものも含めて、学級全体の性格特徴をいう



3 トータルデザイン



4 学年集会 (中1ビデオ)

5 空気づくり (演習「いじめロールプレイ」)



解説

中学校への橋渡し

小学校6年生の3学期に、中学校の先生が出前授業をさせてもらおうと、子どもたちの中学校でのスタートがスムーズになります。教科に限らず、「予防・開発的生徒指導」という発想で、いじめ防止につながる授業をしておく、中学校での人間関係づくり、集団づくりにつながります。「信頼」「協力」「自己中心性に気付く」等のキーワードで授業をすると効果的です。

生徒指導と学校文化

「説教やカウンセリングマインドの時代は終わった」と、あえて言おうと思います。一方向ではなく「双方向」による相互作用で、意図的、継続的に「空気」づくりをすることが、これからの時代に求められる生徒指導だと、この「風土会」では考えています。

「空気」を媒介して「気持ち」は伝わります。生徒に話すときは、今の季節なら、次のような話をしていきます。「インフルエンザも伝染するけれど、気持ちも伝染する。空気がいいのは、いい感情が伝染しているからだ。今、先生が元気に話せるのは、みんなが聴いてくれているから。先生がみんなからエネルギーをもらって元気でいられる。みんなのおかげなんだ！」

この話で生徒に伝えたいのは、「空気」をつくるのは教師ではなく、その場にいる「みんな」だということです。「みんな」が「いい感情」であれば、それが伝染して、その場がいい空気になり、一人でも「嫌な感情」をもてば、それも伝染する。だから、自分の感情がまわりに影響することを意識して、自分の感情に責任をもとう！そうすれば、みんなが気持ちよく過ごせる。というように、メンバーの一員である自分を意識させるのです。

教師のエンターテイメント性

同じ事を生徒に言っても、伝わる先生、伝わらない先生がいます。それは、生徒は、先生の言葉だけを理解しているわけではないからです。生徒は先生の表情やしぐさ、行動等、さまざまな共通項をとらえて判断しています。この先生は口だけだから信用できないと生徒が思っていれば、先生が何を言っても伝わりません。先生のトータルな人間性が「エンターテイメント性」です。元気よく伝えることがエンターテイメント性ではありません。

空気の質を問う

「教室の空気」の質を、先生も生徒も問うという発想をもつと、そこに「文化」「風土」が生まれます。

学級の雰囲気「明るい」「暗い」のは、その時のメンバーによる偶然的なもので、しかたがないという発想では、学級集団は退行していきます。集団は生き物です。ずっと同じ状態にとどまっていることはありません。学級の持ち味を組織化し、成熟させるために、「空気の質」を問うのです。

学級集団が退行すると、集団が分裂し、混沌とし、いじめや不登校、学級崩壊等が起きます。それを予防するためにも、意図的に「空気」をつくるという発想が必要です。

意図的に「空気」をつくった成果が「学級文化」になります。例えば、「友だちに親切にするってこんな態度を示すこと」「ありがとうって言葉に出す」等、まずは意識して、意図的に行動させます。その積み上げの継続で、意図せず、さりげなく親切を示せるようになります。また、意識せずに「ありがとう」って言うようになります。このように、意図的、意図せずの両方を統合したのが「学級風土」だととらえることができます。「風土」とは、意図せず自ずと醸成された「雰囲気」と、意図的に創った成果である「文化」の両方をあわせたものと理解すると、「学級の雰囲気」「学級文化」「学級風土」を整理できます。

トータルで考えて「発信」

学校への「入学」をインプットととらえると、「卒業」はアウトプットです。この間に「スループット」するのが「隠れたカリキュラム」や「相乗効果のある相互作用」を含めた「学校文化」であり、それが子どもたちの社会性を育てています。

卒業後に、学校で育まれた社会性が生きてくることもあれば、卒業後に社会性を身に付けることもあります。これを繰り返しながら、人は成長していきます。これを「遅延的社会化」と言います。

社会性を身に付ける単位は、校種別でも1年単位でも、3年でも、1学期間でもいいのですが、教師が大きなデザインを描くことで効果を上げます。

例えば、宝塚には伝統的な学校文化があります。掃除やあいさつ、礼儀作法に関して、徹底した宝塚の学校文化があります。歴代のスターも徹底してそうじをしていた、それがスターへの第一歩というように、「宝塚の学校文化」の意味を理解すると、内発的に動機付けられ、自らその力を身に付けていきます。「社会のまなざし」「地域のまなざし」も作用し、学校文化に影響します。このように、「学校文化」をスループットすることは、さまざまな相互作用があり、相乗効果を及ぼします。

学年集会（ビデオ鑑賞）

学びの学年集会

集団生活の中で発生する人間関係の相互作用は、すべてエクササイズであり、小手先のエクササイズだけでは効果を生み出すことはできません。各クラスで持ち味があることは、ある意味ではいいことなのですが、指導内容・方法の悪い意味でのバラバラは、生徒指導体制の混乱を招きます。そこに、学年集会をする意義があります。先生たちの同僚性にもつながります。

学年集会は、定期的であったり、特設であったり、先生主導であったり、子ども主導であったり、目的に応じてさまざまです。共通したねらいは、多くの人と共通理解を図ることです。

子どもが集会を「学ぶ場」と意識できるように、「学びの集会」を仕組んでいくポイントは、「活動」「気付き」「楽しさ」「承認」「達成感」等です。

今回のビデオ鑑賞は、重枝先生がある中学1年生対象に、人権学習の講師として招かれて実践した学年集会形式の授業です。授業内容は、日常生活を振り返り、本当にみんなが幸せなのか、どうしたら幸せになれるのか等を、学級目標や日常の会話から考えさせています。

重枝先生は、その学年の子どもたち280人とは初対面です。学年集会でたくさんの子どもの対象として授業をするときには、先生の授業をコントロールする力が必要です。その場所の「空気づくり」が大切になります。「空気」とは、その場所にいる人や物等の無数の要素が現在進行形で相互作用を及ぼしあいながら生まれるものです。

ビデオを見ると、「活動」「楽しさ」「気付き」「承認」「達成感」を媒介として、前向きな「空気」が生まれているのを感じることができました。

ルールとリレーションの確立の方策

重枝先生は意識的に、子どもの「感情」に訴え、「意味」を納得させ、「行動」を促す働きかけをしています。ビデオの一場面を紹介します。

「このようにたくさんの人が集まって、何かをしようとするときに、何が大切ですか？」
重枝先生が尋ねると、「協力しあうことです」「団結力です」という答えが生徒から返ってきました。
重枝先生は大きくうなずき、「そうだよ、これだけの人数が協力し、団結できればここで生活することがとても幸せだと思えるよね。学校に行きたいな、みんながいるから。そんな学校にしたいよな、絶対！」と力強く話し、体育館の空気をひきしめました。
生徒とのテンポ良い対話から、ライブ感のある授業がはじまりました。

「相手の立場を考えるとわかるか？」

「例えば先生が、みんなと一緒に座って、みんなの中の誰かが前に出て、たった一人話をするとしたら」

重枝先生は、サッカー部の生徒をひとり、前に立たせ、自分は生徒の席に座りました。その生徒は、何も話すことができません・・・。

しばらく沈黙・・・ようやく重枝先生が前に出て、その生徒をねぎらいます。

「よく立ってくれたね。はい、彼に拍手」

「ひとりで前に立って話そうとするときに、変な顔をして先生の顔を見たり、ハアとため息をついたりする人がたくさんいたら、先生だってここから逃げ出したくなるような気持ちになる。その態度は、協力っていえるのでしょうか。何が団結力ですか、という話になってくる。『協力』や『団結』って、口だけですかってことになるよね」

そして、ホワイトボードに書きながら、先生の熱い語りは続きます。

「聞いたことは忘れる」 人ってというのは、聞いたことは忘れるものです。

ちょっと想像してみてください。例えば数学の授業で、先生は黒板に何も書きません。

みんなはノートに書いてはいけません。ただ聞くだけです。

では、 $2x+3=7$ で、 $2x=4$ だったら、 $x=2$ になる。

はい、次の問題。こんな風に、先生が話すことを聞くだけだったら、どうですか？

この様に授業が続いていったとしたら、テストで何点とれますか？」

「見たことは覚える」

「それでは、先生は黒板に書きますよ。でも、みんなはノートには書いてはいけません。

こんな授業があったとします。黒板を見ておけば、何となくは覚える。だから、黒板があるんですよ。

だから先生たちは黒板に授業の内容を書いて、説明するんですよ。

でも、そんなことはあたりまえだと、君たちは思っているかもしれない。

でも、何のために黒板があるのかといったらそういうことです。そして・・・」

「したことは理解する」

「実際に自分がしたことというのは、完全に理解します。

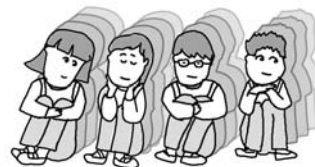
だからノートに書きながら考え、考えながら書くと理解するんです。

せっかく50分間、授業を受けていて、『忘れる』でいいんですか？

『何となく覚える』程度ですか？

やっぱり『理解する』でしょう。

だから、人の話をきちんと聞いてノートをしっかりとるように先生たちは言うんです」



「今から『したことは理解する』という目的で、みんなに実際、活動をしてもらおうと思うんだけど、本当の意味でしてほしい。何かただ、させられているという気分では本当にしたことにはならない」

「それでは、誰かひとり前に出てきてくれる人はいませんか？」

「はい」

「よし、さわやかに返事したね。前に来て。今から、先生と〇〇君とで一緒にすることを、みんなは〇〇君

の立場に立って、考えてほしい。〇〇君には今から、真剣にしてもらうから」

ここから、テニスボールを使った、デモンストレーションがはじまりました。

「このテニスボールが、先生の『おはよう』という言葉。このボールを使って、言葉のキャッチボールをします。〇〇君、おはよう！」

「おはようございます」

「おお、いいねえ～。じゃあ、ボールを投げます。先生の『おはよう』がいくよ！」

〇〇君、おはよう」と言いながら、思い切り強くテニスボールを投げつけ、そのボールは〇〇君に当たってはねかえりました。

会場からは思わず、「エッ～」というどよめきが・・・。

「それでは、〇〇君に聞いてみようか。先生はまだ、〇〇君に謝ってないんだけどその前に聞きたい。正直に言ってください。どんな気持ちでしたか？」

「ムカッとしました」

「そうだよな。〇〇君、ごめんな、本当に悪かった。今度は、〇〇君が先生にボールを投げて。そのかわり、今、自分が思ったような気持ちに先生がならないように、気持ちを込めて、『おはよう』って言いながら、そのボールを先生に投げてくれますか、気持ちを込めて」

〇〇君は気持ちを込めて、ボールを下手で優しく投げました。

そのボールを、重枝先生は無視して受けとりません。



また、会場からは、どよめきの声です。

重枝先生は、会場の生徒に問いかけます。

「今、〇〇君は気持ちを込めてボールを投げてくれたよね。先生と何が違った？」

「投げ方です」

「そう。先生は上から強く投げたけど、〇〇君は気を遣って、下から優しく投げた。先生は、心は嬉しかったけど、わざと無視した、そのボールを。〇〇君、どん気持ちがしましたか？」

「もう、最悪って気持ちです」

「そうだよな。もう、先生と〇〇君の人間関係は完全に崩れた、まちがいなく。ごめん、〇〇君。もう一回、さっきみたいに気持ちを込めて、先生にボールを投げて」

〇〇君は不安げな表情で、もう一度、重枝先生に「おはよう」と下からボールを投げました。

重枝先生はそのボールを受けとめ、「おはよう」とボールを下から優しく投げます。

〇〇君の表情が、パッと笑顔になりました。気持ちよく、キャッチボールが続きます。

「はい、〇〇君に拍手」 大きな拍手の中、〇〇君は席にもどります。

「〇〇君が前に出てきてくれて協力してくれて、先生もありがたいなあと思います。

大切なのは、相手がどんな気持ちになるかを常に考えないと、『協力』とか『団結』は、ないということです。そんなことはわかっているとは思いますが、本当にみんなが理解したのかどうか、ということです」

このように、授業の中に「活動」「楽しさ」「気付き」「承認」「達成感」を媒介として、前向きな「空気」が生まれるように教師が語り、活動していました。

本日の体験活動

「ペア活動」

ペアになって正対して向き合い、黙って相手を見つめます。どんな気持ちがするかを体験しました。思わず笑ってしまうペアもたくさんありました。

「笑う」という行為の意味はいろいろあるのですが、そのひとつに「防衛本能」があります。うれしい笑いではなく、自分を守るために「笑う」のです。

「笑い」の中に何かがあります。それは、見抜こうとしなければ見抜くことはできません。いじめも同じです。表面的にはよいクラスで、担任もまわりも気付かないというケースがあります。その場合は、いじめが長期化します。長期化するといじめもエスカレートします。

表面的ではなく、その奥深くを見抜くためには、時代が変化している今、教育現場にも新たな取組が必要だと思えます。教師がチームになってみんなで子どもを見る仕組みをつくったり、心理学的なアンケートを導入したり、後手にまわらない積極的な生徒指導です。

次に、90度で座りなおし、30秒ずつ話をしました。正対しているときより話しやすく、もちろん、黙っているだけの気まずさありません。体験して感じる活動は、子どもたちにも有効だと思えました。

「いじめのロールプレイ」

風土会参加の先生方の中から、「いじめられ役」として女性教師1人に、前に出ていただきました。

「いじめ役」として、男性教師3人に、女性教師の前に並んで立ってもらいます。

その男性教師3人の後ろに「観衆」として、6人立ってもらいます。席についている先生方は「傍観者」という設定で「いじめの4層構造」をつくってもらいました。

言葉でいじめるのはつらいので、表情と目でいじめるロールプレイを15秒してもらいます。

その後で、それぞれコメントを言ってもらいました。

「いじめられ役」の女性教師のコメントは、「怖くて目を合わせられませんでした。後ろにいる人たちの方が怖かったです」という内容でした。

「いじめ役」の男性教師のコメントは、「快感がありました。スッキリしました」という内容でした。

「傍観者」のコメントは、「自分は関係ないから安心感があった」という内容でした。

次に、「いじめ役」の後ろの6人のうち3人が、「いじめられ役」の女性教師の後ろに立ちます。

そして、最初と同じように表情と目でいじめるロールプレイをして、コメントを言ってもらいました。

「いじめられ役」の女性教師のコメントは、「目を見ることができました。後ろの人を感じ、少し心強く思いました」「いじめ役」は、「後ろに人がいるから視線が分散され、さっきよりは気持ちが弱くなっていました」というコメントでした。

最後に、「いじめ役」の後ろの3人にも、「いじめられ役」の後ろに移動してもらいます。

そして、同じロールプレイをしますが、「いじめ役」の3人の先生方の表情が最初とはまったく違っていました。結局、「いじめ役」がどんどん苦しくなるロールプレイになりました。

このロールプレイは、いじめのキーパーソンが「観衆・傍観者」であることを実感できます。

観衆・傍観者が「空気」をつくっていることが理解できます。

子どもにさせるときも、言葉ではなく、表情や目だけでロールプレイをするルールにして絶対に守らせます。

このロールプレイをすると、「いじめている方もつらい気持ちになってくる。だからいじめはやめておこう」

「観衆・傍観者がいじめられている人の味方になり、それが増えるといじめが止まる」ことを実感できます。笑顔の裏を表情から察知して、全員の責任を自覚して「いじめをなくそう」という空気を生むために、学級の実態に応じて実践してください。「いじめは見ようとしなければ見えない」のです。

本日のキーワード

- 生徒指導は「エンターテイメント性」
- 空気の質を問う
- 学級風土：「学級の雰囲気」＋「学級文化」
- 参加的社會化・遅延的社會化
- 「インプット」「スループット」「アウトプット」



♪ 学習会に参加された先生方の感想 ♪ (参加人数 23名)

- ・いじめのロールプレイはわかりやすく、すぐ実践できるのがよかったです。実際に体験してみて、いじめの傍観者の気持ちを感じました。
人選、状況、やり方を考える必要はありますが、とてもよいエクササイズだと思います。
「エンターテイメント性」の話も、まさに！と実感できる内容で、また、元気とやる気をもらえました。
- ・はじめて参加しましたが、「こんな会があったのか！」という思いがしました。
「とても勉強になりました」というより、「あー、そうなのか」や「そういうことか」と思うことがありました。特に、3学期の今、学級をどう締めくくるのかについて考え、学級活動や総合的な学習の時間の内容を、生徒にとって意味ある時間にしたいと思っていました。どうしたら生徒に伝わるのか・・・。
「空気」を介した感情の伝染がキーワードになりそうです。
- ・空気や感情は伝染するというお話を聞いて、よく理解できました。教師の話だけではなく、すべてが生徒に作用を及ぼしているということ意識して、もっと考えないといけないと思いました。
学級では生徒に、「その場だけ楽しければいい」「当たり前のことをしなくてもいい」という雰囲気をつくってはダメだと、常々言っているのですが、自分がまず、学級の空気を作っていくことが足りなかったのではないかと、改めて考えました。
- ・一度、しっかり「契約」をしておく、「再契約」できるというお話にドキッとしました。今は、学級に「再契約」が必要なときのように思います。残り2ヶ月、生徒の心に届く語りを心がけて頑張りたいと思います。「感情は伝染する」生徒に話してみようと思います。重枝先生が実際に生徒の前で話されているビデオは、とても勉強になりました。これからも見たいです。生徒とのやりとりがステキでした。
- ・「聞いたことは忘れる。見たことは覚える。したことは理解する」
これを「いじめのロールプレイ」で実感しました。意味と感情の両方からピンとききました。毎日の授業の中で、「話し合う」「教え合う」「説明させる」等の活動を取り入れ、仕込み、学習内容の確かな理解につなげていきたいです。

こんなことに悩んでいます！

- ・教師の指導に従わない女子グループへの指導や、影で他の生徒を動かす影響力のある生徒への指導に悩んでいます。もっと学んでいきたいです。
- ・学級に、情緒面で特別な支援の必要な生徒がいます。まわりの生徒が困ったり、心配したりしている状況が増え、どのようにすれば学級がひとつにまとまり一体となれるのか悩んでいます。
- ・リーダー育成に悩んでいます。リーダーシップとメンバーシップの確立の難しさを感じています。
- ・自分たちの主張をすることが先で、人の話をきちんと聞けない学級の生徒を、どのようにしつけていけばよいのかがわからず悩んでいます。教師経験が浅く、自分の指導力不足に反省する日々です。学年が終わるまでには、人の話が聞けるようにしたいと試行錯誤をしています。

(先生も悩んでいるのです。こんなに！！それを素直に、生徒に語ることも大切かもしれません。先生が「正義の味方」になって解決するというスタンスも、もちろん大切ですが、生徒と一緒に解決するというスタンスも、同じように大切だと思います。)